

中国における日本語教育事情

— 大学日本語専攻の場合 —

彭 広陸

はじめに

戦後、日本は急速な復興を成し遂げ、一躍経済大国に成長した。それには文化的な要因があるとされて、日本文化が注目的となってきた。それに相俟って、日本語教育は、世界的に隆盛の一途を辿っている昨今であるが、日本と一衣帯水の間にある中国もその例に漏れず、相変わらず日本語ブームが続いている。本稿は日本語専攻の教育に焦点を絞って中国の大学における日本語教育事情を紹介することを目的とする。



一 基本的なデータ

中国における日本語教育の発展ぶりは目を見張るものがある。精確に言うとは、全国的には日本語学習者の数が減ってはいるものの、高等教育における日本語学習者が速いテンポで増加しつつあるのが現状である。『高等院校日本語專業基礎階段教学大綱』（大学日本語専攻基礎階段学習指導要領）（大連理工大学出版社、二〇〇一年）の「前言」（前書き）によると、一九九九年では、日本語専攻が設置されている大学が八六校、学生数が約八〇〇〇人であるが、二〇〇一年となると、日本語専攻が設けられている大学は約一一〇校、学生数は約一万一〇〇〇人に急増しているとい

う。特にここ数年来の日本語学科の新設や大幅な定員増加によって、現在は遥かにこの数字を上回っている。関連資料によると、二〇〇六年現在では、日本語専攻設置大学の数は二六三校に及び、日本語専攻の学生数は一四万七〇〇〇人にも達しているという。現在では、中国において日本語は英語に次いで二番目に人気のある外国語になっている。

二 歴史的概観

(一) 本科の場合

中国の大学の本科レベル（日本の学部教育に相当する）における日本語専攻の教育の歴史については、新中国成立前に遡ることになる。北京大学が自他共に認める日本語教育の老舗であり、日本語専攻の教育に先鞭をつけたのはほぼ間違いない事実であろうが、その歴史については諸説あつて、定かではない。例えば、北京大学外国語学院院长の程朝翔教授の調査によると、清朝政府が外国語の人材を養成するために一八六二年に設けた京師同文館が、中国の最初の国立大学として一八九八年に設立された京師大学堂（北京大学の前身）に一九〇二年に吸収されて、翌年に訳学館に改名され、修学年限五年の英語・ロシア語・フラン

ス語・ドイツ語・日本語の五つの言語文字専科が設けられたという。これが中国の大学における日本語専攻の濫觴をなすと考えられないこともない。

一方、李宗惠「二〇〇一」では、北京大学の日本語専攻は一九〇二年に始まるとされている。

また、北京大学の教授だった周作人「一九九八」によると、一九三五年に北京大学の四年制の日本語専攻の第一期生が卒業して以来、一九三七年にかけて、都合三クラス、七名の卒業生を世に送り出したという。

さらに佐治圭三「一九九一」には、次のような件があつて大いに参考になると思われる。

「中国日語教学研究會會員通訊 三二（一九八八年三月）によれば、北京大学の日本語学科は、一九二八年ごろ文学院外国文学系の一学科として日本文学科が発足したことに始まり、その当時日本文学科を主催したのは、魯迅の弟の周作人で、そのほかに銭稻孫・徐祖正の両教授も学科を担当していたという。この日本文学科は一九三八年まで続いたということであるが日中戦争の間は、北京大学が清華大学・南開大学とともに昆明へ移されて西南連合大学となり、そこでは日本文学科は設置されなかった。なお、日本占領区においては、北平大学文学院外国文学系日本文学科は存続していたということである。一九四五年八月、日本の敗戦

によって、西南連合大学は再び北京に戻り、授業が再開され、日本文学科は東方語言文学系の下に日本語教研室として設置されたが、学生の募集はなく、数人の教師が日本語研究を続けるにとどまっていた。

精確な開始時期については未だ不明な点が多く、今後の検証に俟たなければならない。以下では、佐治圭三「一九九一」に基づいて、一九八〇年代までに開設された代表的な大学の日本語専攻の開始時期を示しておく。

北京大学 一九四九年以前

解放軍外国語学院 一九四九年

对外經濟貿易大学(北京对外貿易学院) 一九五四年

上海外国語大学(上海外国語学院) 一九五九年

北京外国語大学(北京外国語学院) 一九六二年

吉林大学 一九六三年

北京第二外国語学院 一九六四年

黑龍江大学 一九六四年

大連外国語学院 一九六四年

復旦大学 一九七〇年

広東外語外貿大学(広州外国語学院) 一九七〇年

山東大学 一九七一年

山東師範大学 一九七二年

福建師範大学 一九七二年

武漢大学 一九七二年

南開大学 一九七二年

北京師範大学 一九七三年

河北大学 一九七三年

華東師範大学 一九七三年

天津外国語学院 一九七三年

四川大学 一九七三年

東北師範大学 一九七四年

西安外国語学院 一九七四年

四川外国語学院 一九七四年

ハルビン師範大学 一九七五年

延辺大学 一九七七年

南京大学 一九七七年

杭州大学 一九七七年

内蒙古大学 一九七九年

国際関係学院 一九七九年

成都科技大學 一九七九年

天津師範大学 一九八〇年

暨南大学 一九八三年

西北大学 一九八四年

西安交通大学 一九八五年

深圳大学 一九八五年

撫順石油学院 一九八六年

(二) 大学院の場合

北京大学の日本語学科が中国で初めて大学院生を募集したのは一九六〇年だったが、どういふわけか修了した者には修士号が授与されなかった。一九八一年に至って、北京大学・吉林大學・上海外國語大學に、日本語文學専攻の修士課程が設置されるようになる。二〇〇六年現在では、四七の大學に日本語文學専攻の修士課程が設置されているといふ。

一方、日本語文學専攻の博士課程は、以下の大學に設置されている。

北京大學 一九八五年

北京外國語大學 一九九四年

東北師範大學 一九九八年

上海外國語大學 二〇〇〇年

吉林大學 二〇〇五年

三 ニーズの多様化と教育目標の多様化

高等教育における日本語教育が飛躍的な発展を遂げたのは、以下のような理由が考えられるだろう。まず、学習動機が多様化である。いくつものアンケート調査の結果から分かるように、日本語を専攻する学生の動機はまちまちで

あるが、その中で、日本の大衆文化の影響を強く受けたことを理由にしている若者が多い。特に、日本のアニメ・漫画・テレビドラマ・ポップス・コンピュータゲームの影響が大きいようである。中国社会に日本の大衆文化が広く浸透したことによって、日本語への興味、日本語学習の関心が広がったと言える。

その外にも、「日本語が他の言語より習得しやすいため」だから」といった消極的な理由もあるが、「日本語でコミュニケーションを図りたい」とか、「将来の就職のため」といった理由も大きな比重を占めているという。

実用の観点から見れば、何よりも就職に強いという面である。数多くの日本企業が中国へ進出し、中日貿易も大きく拡大しており、こうした状況が日本語専攻の学生に多大なチャンスをもたらしてきた。そこで、「日本語をマスターすると、就職の心配がない」という意識ができてきているわけである。

こうした日本語学習の動機が多様化、学習ニーズの多様化は注目すべき事実である。このような変化を反映するように、大学も従来の日本語一点張りの教育に満足せず、多様化するニーズに対応するための様々な工夫がなされてきた。ダブルメジャーで複合型の人材を育成するとか、日本語プラスアルファを売りに行っている大学も少なくない。どのような人材の育成を目指すのか、教育目標もまた多様化

しているのである。

四 日本語教師のあり方

高等教育機関では、非専攻日本語（日本語を専攻としていない学生のための外国語科目としての日本語）としての日本語を教えている教師の多くが学部卒であるのに対し、日本語専攻で教えている教師の場合は、修士課程あるいは博士課程を修了した者の比率が高い。喜ばしいことに、近年日本で博士号か修士号を取得した者が帰国して日本語教育に従事するケースが増えつつある。そして、今後ますます帰国組が増える見込みである。

日本語教育の規模の拡大に伴って、日本語教師の数が急増し、そのため若手教師が中堅層となつていく大学も増えているようである。全国的に二〇代、三〇代の日本語の教師の比率が増えつつある中、若手の教師の研修はさらに重視されるべきである。

日本の国際交流基金と中国教育部の共同事業として設置されている北京日本学研究センターでは、二〇〇一年から数年にわたつて修士の学位を持たない在職の日本語教師を対象とした修士コースが開設されていて、日本語教師のレベルアップに一定の役割を果たしていた。国際交流基金は、また、毎年のように中国の大学教師を四〇名ほど日本

語国際センターの日本研修に招いていて、中国の日本語教師の質の向上に大きく貢献している。

その一方で、中国人の教師だけでなく、日本人の専門家や教師も中国の日本語教育の現場で大いに活躍して重要な役割を果たしていることも特筆すべきである。

五 日本語教材のあり方

日本語専攻の大学生用の教材は、各大学で独自に開発されている傾向がある。自主開発教材には様々な面で限界もある。ネイティブでない中国人の編集したものだから、不自然な日本語になつていく箇所が見られることは教科書として大いに問題視されている。改訂前のシラバス・ガイドラインに準拠する何種類かの教科書が市販されているが、教師が満足して使えるようなものが少ないということがしばしば指摘されている。いちばん大きな問題はやはり内容的に古いため、学生をうんざりさせてしまうことである。一部の大学では、日本で出版された教材をそのまま、あるいはある程度アレンジするなどして使用しているが、中国人向けと限定されたものではないので、その点に不満が残るようである。具体的に言うと、そうした日本に留学する外国人向けの日本語の教科書は、内容が中国とはほとんど無縁なため、それで勉強して日本語がマスターできて

も、自分の国の文化を日本人に紹介することができるようにはならない。学習者の特性を無視してはなるまい。日本人の専門家と全面的に協力し、共同で中国人向けの教材を開発するのが目下の急務である。実際には現在はそのような動向も見られる。

例えば、北京の教員の大学の教員が日本のいくつかの大学などの研究者と共同で開発した教科書である『総合日本語』（第一～四冊、彭広陸・守屋三千代編、北京大学出版社、二〇〇四～二〇〇六年）は好評である。この教科書の特徴については、次のようにまとめることができるだろう。

まず、大学の枠に囚われずに、そして中日両国の第一線の日本語教育者・研究者の本当の意味での共同作業によって生まれた成果だと言ってよいだろう。中日双方の担当者がそれぞれ最大限に自分の力を発揮できたことが、『総合日本語』をヒットさせた最大の要因だと思われる。構成について言えば、全体的に「会話」と「読解」の二つの部分に分かれているが、数年間専攻で日本語を習っているにも自由に日本語の会話ができないという従来の難点を克服するために、初級の段階では会話の方に重点が置かれ、中級となると会話と読解が平行して重視されるという形を取っている。特に会話の場合は、自然な日本語の発話となるようにいろいろと工夫されているだけでなく、大学生にとって親

しみを覚えやすい身近な生活が取り上げられ、四冊通してまとまったストーリーとなるように構成されているし、登場人物のキャラクターもいきいきしているの、生きた会話として、学生たちに親しまれている。そして、初級の舞台が中国に設定されているので、自然な形で中国の文化を日本人に紹介できるようにしているのに対して、中級の舞台は日本に移り、なるべくステレオタイプを避けて、一個人としての中国人留学生の目から日本を見て、肌で日本を感じるようになっていく。

総合的な日本語運用力と異文化コミュニケーション能力の養成を狙うところの、従来の日本語の教科書と一味違うこの新しいタイプの教科書が中国の「十一五」（第十一次五か年計画）国家級指定教科書に選ばれ、さらに、二〇〇六年北京高等教育精品教材（ブランド教材）に入賞したことは実に喜ばしいことであり、中日両国の学者の交流の結実だとも言えるだろう。

六 日本語研究の現状

(一) 研究の質の向上

中国オリジナルの日本語研究が増え始めたのは、一九九〇年代の初めごろからであろう。それまでは、日本におけ

る日本語研究の紹介や日本の研究者の二番煎じ的研究が多かったのである。最近では、言語事実に基づく記述的な研究や、コーパスを積極的に利用する研究が著しく増えている。

しかしながら、中国における英語研究やロシア語研究などに比べると、まだ日本語研究のレベルは低いと言わざるを得ない現状である。これには、二つの問題があるように思われる。

一つは、多くの研究に理論的な裏付けが欠如していることである。全体的に理論面を軽視する傾向が見られる。つまり、理論面の研究が浅い研究者がかなり多いと言いつ換えることができる。

いま一つは、研究者として、科学的な方法論を十分身に付けていないということである。初歩的な学術訓練さえ受けたこともなく、規範的な学術論文の書き方さえも知らないという人も決して少なくない。

しかし、こうした現状は、改善されつつある。近年、中国国内で養成された日本語教育の人材や、帰国した留学経験者が増えるにしたがつて、堅実な研究をする研究者が増えてきた。毎年、多くの研究成果が発表されているが、目立ってレベルアップしてきている。

また、日本の研究者との交流も確実に増えている。その表れの一つが、中日双方が共同で開催するシンポジウムが

増えていることである。こうした機会は、中国の日本語研究の質の向上に大きく貢献している。今後は、中日の研究者による共同研究も大いに期待される。

(二) 研究者としての大学教師のあり方

大学の教師は教育者であると同時に研究者でもあるべきであるが、残念ながら中国の大学の日本語教師にはそういう自覚を持っていない人が案外多いのである。なかには、研究のイロハも知らない人がいる。

近年、大学は、教師の研究に対して次第に強い圧力をかけるようになってきている。しかし、大学からの要求がまったくない、つまり、研究発表や論文の発表が義務付けられていない大学がまだかなりあるのが実状である。また、論文本数など研究のノルマを決めている大学でも、それがこなせないからといって罰則があるわけでもなく、結局ノルマが形骸化している場合もある。逆に、教師のほうも、本来の研究目的というよりノルマをこなすために論文を書いているという人も少なからずいるようである。また、全国的に見れば、自主的な研究会や読書会も稀にしかない。そのため、研究者同士の交流が少なく、共同研究も皆無に近い。

一方、大学がどのような研究環境を提供しているかという点、全体的に見れば、学校の教師、特に大学の教師はし

かるべき待遇を受けていないため、アルバイトに時間を取られて、研究の方がおろそかになっているケースも少なくない。一時ほどではないものの、大学の教職を辞めてしまふという学問離れの現象も見受けられる。大学の教師でも基本的に研究費は支給されず、個人の研究室も与えられていないという嘆かわしい現状である。教師の待遇や研究環境を改善することが、研究の質を高める必要条件の一つであることに間違いはない。

(三) 学会のあり方

中国の大学における外国語教育では、往々にして専攻と非専攻が断絶していて、横の交流が少ない。これをよく象徴しているのは、教育部所属の外国語指導委員会である。外国語指導委員会には日本語専攻の部門と日本語非専攻の部門が別々に設けられているのである。

学会も、専攻と非専攻の別によって「中国日語教学研究会」(日本語専攻)と「中国大学日語教学研究会」(日本語非専攻)の二つに分かれているのであるが、その必要性和合理性に筆者は疑いを持っている。

これらは学会といっても、普通の学術団体とはやや異質のものであり、基本的に個人会員制ではなく、大学単位で加入するものである。そして、例外を除いて、この二つの学会への同時加入は難しい。

また、学会の理事や常務理事などの役員も、選挙によるものではなく、決められた大学からの推薦者がなっているため、各大学の日本語学部長や日本語学科長が多く、専門が日本語学や日本語教育でない人が役員になっているケースも決して珍しくない。そのため、学会組織もお役所な色彩が濃く、学術性が薄れて学術的権威があるように思われないし、中国における日本語教育と日本語研究の向上のために十分に機能しているとは言えない。

日本の学会や中国のその他の学会と比べた場合、特にそれを強く感じる次第である。一日も早く純粋な学術団体である学会に脱皮して欲しいが、制度的な問題であり、早期の解決は望めそうもない。

一方、中等教育でも、それなりの学会はあるが、高等教育の学会とは接点がなく、中学・高校の日本語教師が大学の教師と同じ場で研究発表をすることはありえない。このことは中国における日本語教育と日本語研究の発展の上で、望ましいこととは言えないだろう。

(四) 研究誌のあり方

中国では、日本語関係の研究誌は、対外経済貿易大学から刊行された『日語学習與研究』を措いては他になかった。同誌は創刊二十数年来、中国における日本語および日本語教育研究のために多大な貢献をしてきた。特に、「中

国日語教学研究会」の学会誌になってからは、ますます注目されるようになった。もともと、文学関係の論文も掲載されているため、純粋な日本語関係の研究誌と言えないところもある。

そういった状況の下で、いわば中国初の日本語研究の専門誌である『日語研究』が二〇〇三年三月に大手の出版社である商務印書館から刊行された。同誌は創刊以来、レベルの高い論文を掲載していることで、国内外から注目されている。また、毎輯のように日本の代表的な研究者の論文を掲載しているので、中日学術交流の窓口にもなっている。さらに、書評を重視していることも同誌の特徴の一つである。

すぐれた研究誌の刊行は、研究を活性化させ、それがまたすぐれた研究を生み、研究誌を盛り上げて行く。そうした研究誌が一つでも多く発刊されることが望ましい。

おわりに

以上、中国の大学における日本語教育の諸相を日本語専攻を中心に概観してきた。中国の日本語教育は今後ますます発展していくことが予想されるが、以下の四つの課題が残っているように思われる。

- (1) 日本語教師の質の向上にもっと力を入れるべきであ

る。

- (2) 教材開発をもっと重視すべきである。
- (3) 学会組織の機能を強化すべきである。
- (4) 中日両国の日本語教育者と日本語研究者同士の交流を深めるべきである。

注

〔1〕 武書連『挑大学 選專業——二〇〇七高考志願填報指南』(中国統計出版社、二〇〇七年)を参照した。なお、日本語専攻の大学生数は、中国日語教学研究会会長の宿久高教授からの情報によるものである。

〔2〕 武書連『挑大学 選專業——二〇〇六高考志願填報指南』(中国統計出版社、二〇〇六年)を参照した。なお、一部の大学は日本語文学専攻ではなく、外国言語学または応用言語学という専攻名で日本語文学専攻の修士課程の院生を養成している場合もあるので、実質的には四七の大学をかなり上回っていると計算できる。

〔3〕 修士課程同様、実際には、日本語文学専攻ではなく、外国言語学または応用言語学という専攻名で日本語文学専攻の博士課程の院生が養成されている大学も、広東外語外貿大学・解放軍外国語学院など、数校ある。

〔4〕 公開されているものとして、日本国際交流基金のHPに掲載されている「日本語教育国別情報」における「二〇

○三年海外日本語教育機関調査結果」を挙げることができ
る。その「学習目的」の項目では、「初等・中等教育」
「高等教育」「学校教育以外の機関」の別にデータが提示さ
れており、それぞれ異なる傾向を見せているが、「高等
教育」の場合を見てみると、「将来の就職のため」「日本の
文化に関する知識をえるため」「大学や資格試験の受験
準備のため」「日本の政治・経済・社会に関する知識をえ
るため」「日本の科学技術に関する知識をえるため」とい
う順位になっている（[http://www.jpbf.go.jp/japan_j/overseas/
kunbetsu/2005/china.html](http://www.jpbf.go.jp/japan_j/overseas/kunbetsu/2005/china.html)）。

参考文献

- 王宏 一九九一 「中国における日本語教育概観」『講座日本
語と日本語教育 第一六巻 日本語教育の現状と課題』明治
書院。
- 佐治圭三 一九九一 「戦後中国の日本語教育」『講座日本語
と日本語教育 第一五巻 日本語教育の歴史』明治書院。
- 篠崎棋子 二〇〇〇 「国際交流基金リポート「中国」転換
期を迎えた中国の日本語専門教育——中国の大学日本語専
攻教育の動向」『月刊日本語』五月号、アルク。
- 周作人 一九九八 『知堂回憶録——周作人自伝』敦煌文芸
出版社。
- 彭広陸 二〇〇一 「日本語研究の現況」『国文学 解釈と鑑
賞』七月号、至文堂。

彭広陸 二〇〇四 「中国における総合的日本語教育の現
状」『第五回 国際日本語シンポジウム報告書 国際日本語
の可能性』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科。

彭広陸 二〇〇六 a 「中国における日本語教育事情とその
周辺」『環太平洋地域における日本語の地位』（第一〇回国
立国語研究所シンポジウム第三部会）独立行政法人国立国
語研究所。

彭広陸 二〇〇六 b 「海外における日本語研究」『日本語の
研究』第二巻第三号。

李宗恵 二〇〇一 「北京地区大学日語教育簡述」『日漢双語
辞書編纂與日語教学文集』商務印書館。